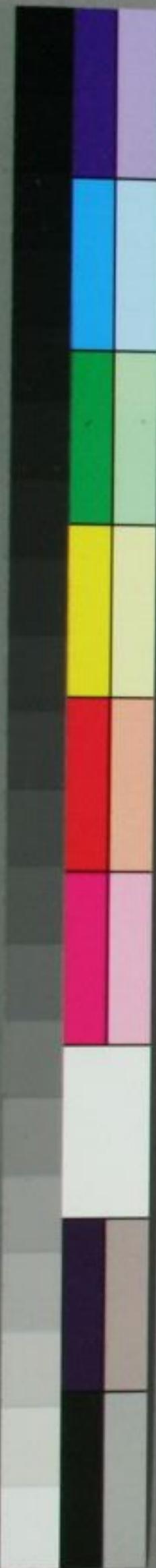


A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

85  
80  
75  
70  
65  
60



片歌百本向巻序

象吸秀菴のうへともやせ四云店  
にて片歌はきとあきつうひびくは  
と二本はきとせんばせりくとくと  
冊子サツシとくかに二本向巻とくよし後  
ひげとづけのともとく又あきつうひ  
なぐれ下々りとおけとく是とく  
あひ鶴木に載もるつてく百本向



蓋せり。蓋百衣とよハアシハツ  
軍ふ。アリ。テヒシ。ヒヨ。毫末。ハアシ  
アリ。アリ。枝。おひそせ。サヌ。アシト。アリ  
ト。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。  
車や。シ。末の日。篠廬。権。東。アリ。



序歌百夜同名卷之二上

目録

- 序歌ハ神武の御代を始てよ半と同 初丁
- 俳諧の歌トアハトアハ四丁
- 續句ハたゞれは物也トアハトアハ四丁
- 三やび人の御状と同 五丁
- 氷川あまの半 六丁
- 序歌のそへかとてがのすん半と同 七丁
- 序歌くえさると同 七丁と同 八丁

- 今世歌にて古代のよきもとをさするをいにと向 九丁  
○今やうの序歌記事 九丁ウ  
○かひりくらむとげ序歌よりあすやあすやと向 十丁  
○えもれ助語のキ ナ一丁  
○あはとばの教訓よりな事 十二丁  
○十四言より教訓よりと向 十二丁ウ  
○次の十四言よりまかづるよれはまやと向 十三丁  
○帰る處よりあ並の事 十四丁  
○切字より事 十四丁ウ
- ちき日みづう来の事 十五丁ウ  
○序歌に印オシテと用ひゆす 十六丁  
○きのはしきにせは旋セドウカ起のあやをと向 十六丁  
○複句と序歌の事と向 十九丁  
○虚実とよすり十九丁  
○序歌の事とせすれにせすれとよすり 十九丁ウ  
○じばふあきあふす 十九丁ウ  
○疎歌集の文あれ事 ニ十一丁ウ  
○序歌の事とよすりと向 二十六丁

原翁の物語と曰く問 二十二丁

○音を乞ふと学びて之を教へる所が多々あると聞ニテ

○施設を許すことと種をねらうことそのがどのくらいを問二十三

○ とくどの助語れす 二十四丁ウ

○ そは鷹叟の藝事ニ十五丁ウ

○五十枚の仮すれあ、  
ナナ  
二十九ウ

○雅言平語めいごはうちの事 二十七丁  
十九丁

○某作の画法に因みやびのあと

序歌百夜問答卷之一下

因  
緣

○片歎にすきはく。左と向三十丁

○再び讀句ハ戯きうる所とある旨と向 三十アラ

●常に流言をも用ひておきやと問  
三十丁ウ

新セラフ

○ 紫苑と牡丹の季節と同三十四丁

○まみうの説 三十五丁

○神のるよりかず 三十六丁

○殊ば難徳の役 三十七丁

○花づけ役 三十七丁

○益の新とつひく用くり役ゆきと問 三十九丁

○済つちどまね序役と問 三十九丁

○死乞はしめの役 四十丁

○あさぎの役 四十一丁

○着車ひたのオと問 四十二丁

○佐保城のオ 四十二丁

○めぐらしむとくの左と問 四十三丁

○季の風ふと問 四十三丁

○古今先名序に殊の様とはあすと問 四十五丁

○施於無序役にへ育てか古便を用ふとと問四十五丁

○序役とかくづけにぬのあはす 五十九丁

○序中に冠辞のうきと問 四十八丁

○施設無序役のかくづけき旨と問 四十八丁

○祥しげみ又ゆるととすの役 四十九丁

○神佛へまは序づけむ 五十一丁

○佛詣あへてかりくまほをあへて序教と唱ふを問二丁  
○衆人皆醉うて寝たまに醉ふあよとあがつ五十  
三丁

○佛詣あへてかりくまほをあへて序教と唱ふを問二丁  
○衆人皆醉うて寝たまに醉ふあよとあがつ五十  
三丁

丹波百夜聞本

序歌百夜向答斐一

上毛野國新町驛

鳥貞問

支序歌ハ神武條ニ三育まで侍りまを偽建令北  
あひそびらう聲てゆきゆまふはひたるゆ侍  
涼日昔向かよ一絃人偽建令の序歌うち舉てみせくも  
かこりれど世序歌の道は遠祖トヨタマヒモハ世令下ま  
小童るおぐりける財うちとめむみりたわひ已に樂<sup>アシテ</sup>偽<sup>ミミ</sup>建<sup>ミタ</sup>き  
多<sup>タ</sup>すみ及ばずゆじば序令小及ばずとも顧<sup>ドキ</sup>一<sup>タ</sup>リ

傳記のみとのう小きじきにまよひる奉れゆくのあはま  
ぞれにぞへりるやぐらへ少御のしりこそくおりて  
あきゑじすもとまつりよりまでにたりまわす  
人の喜風涼声とてなるもよくと少崩シタツリ財カネよびても  
まをのち方ミヤヒとくじゆ人代ヒトダひ人ヒトよきんや  
きやつれだよみかよふかうと傳ヒタチ被ヒツクむけふ  
とうそのひる色イロともとをなと遠アツとくいを  
ざくらじを貫スルくわらぶるよと難波津ミナミツの二首ツウと筆シテ  
サニシニこと秋ハ父母ヒトコトにりんと書シテり一ヒコのよ  
とくはりてのすなほみ行歌ヒツクハ神武條ミツツヨウ毛已モヒに

ゆうどいそくまやれオホニウタ歌ウタ小かうて是ヒテ歌  
りと安丸ヒツラめ此ヒテ書シテりよはふよきめくらや侍シム人  
様マニでさシマへ

下色野歌須

百尋向

吟題集ヒツク言ヒツクに曰蓋ヒツク俳ヒツク游ヒツク吟題ヒツクとすははかうと  
書シテりやづれよて甚ハえ未ヒツク題ヒツクせむシムる  
集シムれぞと少ヒツラハ片ヒツク歌ヒツクと留リへかき向シマくとくし  
よて片ヒツク歌ヒツクと集シムがくシムてさか紀ヒツクとすなほんと書シテる  
涼ヒツク日ヒツクあはれと言ヒツクるもの十九ヒツクかほるものとすなほんと書シテる

序歌はざく

百翁曰まづはほるとくわうてあさまや  
涼曰もよりの序歌けり何うか

百翁曰まづは其歌の序歌はなけどきものも  
侍人ふよりてれるを

涼曰題あじより上中下院のせれたり小竹には僕小寺  
くるものもあらど題よりていふよまだなどせまき道  
あも何ねんをもつむ侍

百翁曰まづは其歌はまよひ

涼曰かたづれ涼きゆみわめ

百翁曰やアリサカタス甚也とあつて  
涼曰今代能謡とりものと序歌とのものと二つあるに  
いわばゆゑ小生より向もあすなりと能謡とせ唱へて  
えみすものすばらしく序歌はれど家小がねてはり  
能謡と生ずりてからまし序歌は歌とすばらすり侍  
さへ行たしむいおよびをに唱へ能謡せよとて一  
金くれどこのみよ内ひしもとへなきにせり能謡  
甚船の名とて西風船小舟せよ体の名なうとあき  
已小能謡の連歌と書へられ人代むくろなう甚  
甚船甚船の二人小舟くふうへぬれど家小がね

りよりテ序歌ハ異事のなりとおもひて荀ハ俳諧ナリ  
序歌よりへうべなどり人もありかうべどもすに  
あへ序歌ハ十七言十九言の歌をよき歌代中小云風体  
ほり俳諧体ありもひそひ先ハ俳諧の序歌小げじ風の  
序歌なりこひ云風の序歌小あへ俳諧代序歌ナリと  
ある也

百翁曰まほの類集代中身ハ俳諧の序歌のにて眉の  
序歌すくなきうかに其俳諧の体のと号けてやハ  
其體も

涼日もまきのへきまくまくふあひ先小字もく今代

俳諧といふものの脚序歌ナリとをいふえは行きて  
ゆゑにかくはす。内身其もとほり小もりめう  
よそ俳諧内身歌とす。たゞ五七句とがたを足す。も  
俳諧内身歌とびづあると書ぢれりうよとあふ  
あひくらむとじまとてよし

武騎西

西羊問

あひうー俳諧の名目を序歌小りへうべなど  
さく侍りふいみへう連歌了るものうて傳句  
あひうだ小俳諧は傳句ハ歌にうれのすと

一のいとれいとほくと小手

涼田向きとく残毛をたまへるとては二葉圓音を  
已小海アシマへと連歌のとくとてをにはた歌小遣し物樂  
下下アシマでれを残句するゆねバの小ましりへあうとひ  
毎アシマ俳諧アシマための残句吸み下にちあすとせひに  
まのまなば疎文かはきとむとひつまて口とつ  
やもせまとれり中に一とすも益アシマなとそきへなく  
皆アシマかなきものとば伐たましのあくはてをすとよ  
をとすら甚アシマく連歌する人代アシマのたましれ小いづき  
にあらの俳諧アシマなれど残句をまかせよとどうたハ

かれのもれりりうちれどもぼ夷アシマどもやじふまき  
やん疎向アシマきたをすれの無アシマふまきとアシマー云アシマれと  
このじもの行アシマて是アシマとくせじ

同

琴詩向

風種アシマのあれよもいのわからまべーももにあと  
奥アシマーもとばづくてをれとまじにとかよ、これ  
いづりる聲アシマで

涼田風種アシマのあれよへひあもがつゝまーとすりゆるま  
みも侍アシマだまこと人のま風アシマふもとまなーれハ

そこの間心りるべーされど西行社周れたるのハシモ  
カをかうて歌とみだるきーともアラモチあしも  
をとせじまくる人々ハシモアラモチアリわ漢の  
羽客雪はざーづれもあをきーみをばづきてせれ  
よしゆじゆともきんくほりもどすりとじくすす  
風経の道ナウバ風経モカキヒツ燐<sup>ヒツル</sup>ナリヤバ  
おやい小豆<sup>アズキ</sup>のねにりともアラモチアリハ旅されどモ  
すくも経因西行をまがばさうとあらやーみあはな

同

可卿向

冰のおあれよりみだりきはひりも月の  
つとまことかうてにてよると停りたれハ  
暮のまみをあドそれと氷室<sup>ヒマツ</sup>にて  
せ一日にすみゆうひし

涼日みりくき影るかでひひろの匂とはくね  
がやい小行<sup>コジム</sup>いびく<sup>イビク</sup>でも序歌<sup>シガ</sup>かくハ後の聲ためよ  
すくへまのタヌ<sup>タヌ</sup>今かややあに冰のやもれもあふ事ハ  
みをき影るかうあもはのんれ小なりてれ  
ほまちひをいとじものと見是其よしあたぬの  
かうべるやうみのじろのゆと向てつくるひすへの

りれど下めをさしかかるまをいまと、下へはふ  
ちり氷室れる日が死に徳死小安一とて衰に  
奉じ

同

古由向

お口をに俳諧す極ハ言語にて男は女、女は女  
ひづりみもひ出べきねりるが故ふひろくも久代  
たのみくするとわたりきら、或よつ伏の詞をも  
あつよぬとせはなとこれよしにじりう人也  
涼田男はくく女弓弓の写りみもひ出べきねハテ歌

下りテ歌即そにソ俳諧下り何ぞとあるは  
されどそれが俳諧小いきくまにとべズ人ヨリナリモ後  
聲高下りとていいもてさりヤニモ右ソ教ハリシズ人ノ歌  
ことをきうとおもへまくはりてゆろやすきねがつてよもの  
あやあやびくまくえりるとおだえなるハのうと人よひう  
りうと歌ふ其詞をそに生すが處なりと能諧よ  
揚れどもとくまくすや我テ歌と唱てそするものほほ  
その俳諧小からずがれどそのあやまちかーもあべそ  
人代歌をくまくすや我テ歌と唱てそするものほほ  
うちともよやよくよつ伏のうに下りて西原が加ひう

およそ其まれものばかりおり候原ノ さうのや  
こそその済小ふ流後も又もまたよびて其のひくき残  
みもごとくせをめぐるまことにいじるたう  
ほくへぐくときあふわふかまことれどさうもとくと  
するにこまへ火にあらずあればア軍かくくとが  
ごくあれどのすはくまつたへふるともくみれて  
ものなが今うきをいゆへの邊ふりてぬくをやと  
今うきをうけをあぐくとてうがくぬ道やあや  
まちだりとゆかうもあゆむかにとつ代のすとまう  
けて向むけるハヌスビ今うかねう十ヶハツハ皆

おもとアヘテのすりはりそれはよもとす湯て片歌  
よもじハ仰あまうびの道うて仰くじうきるきう  
よてよしははずみもひもつ巻きハ片歌なりと  
つるあれりク

同

## 祇翠問

片歌と唱ふに及べども其匂代はぬ俳諧小うえ  
らぬ能云ふよわゆるに其ふきみれハ能言  
よもじハ其能い

涼曰俳言すよと人れきとなられりのゆとも

うねもかたにす小ちゆうび因ざれ詞りどく  
一きわとてり三十云とひも萬葉小ゆふ  
テ歌かかく其佛言すものありステ歌ふつてりよ  
にとば鳳凰ともち語ひ其詞の教宣さるまの事  
うはより外いあじだ人三十も下も威風も  
八十音玉をみふる極ともじよひし其詞は教ま  
れふりみひ又詞の教はりばにとば相小位  
あやきももへれかむる詩は玉ともあらハ極めと  
りきどももる麗とも書へれをれより詞と  
片被の詞とれりうるよおぞまなうれど又の

うへん巻ともお病ともがどうも是ハ其之は原  
るへきなり

同常泉

水樹向

俳諧とてをれおこはりもののみを近せりの  
詞ともてそらうれさまき代れもとあてま、或  
いづすを意得す

涼日は暮は先小吉由の間小のべら今れだへる、或に  
そんじに秋もいづれもすとあてまもしてとば詩集  
ぐるもの田と争ひて、或争ひて争ひて争ひて

片けりめたりきてそりてひにかゝとをゆきにす  
生てこそ見がちあはうへりれのみてすと  
にま

武志多見

里卿 士鳳 共問

今代詞をもて今のもと修る是今や叶テ歌有り  
さるいわへとほへ事ともばくよてひに復  
いよともいふ又てはきゆもいふんを

涼日雪てまかみすわすは今や叶テ歌有り

つてはりだよばるへ代歌でりすも其時のすを  
もて其時の風俗を傳れる物ならん今やす今やす  
詞をもて今や叶風俗成修る是何ぞ異りかくま  
後の人々とみまつ今様者とみまがく色よりふ事の  
年と處が今けり、コレコト悉古語はくそくがくすゆになぞ  
詮じて音が中にすなくいすまことよし聲志とすとる  
行とすとる

上毛赤岩

度江問

いへけよう内など狂歌小繁ハラ今叶歌みハ

戸ノ門のうなづくや

涼日ひじけたる詞げ小戸歌あはすくは高かハニナ  
えハ其心れにくみ浅くはなして直に词浅ひへてくる  
ものあれど詞を極めにひづねるつぶがくじつ  
あがひひじけらるて作り戸歌ハ詞をすくはうして  
其心をたくみる處そひじけらるて書き詞をすくは  
まればひすへ戸歌をことじ直にうらもひよなう  
今代戸歌のにびひむれりもじきと專てこくめるを  
持れが中小詞さと淺間がうて在れ雲  
石<sup>カス</sup>日<sup>ヒ</sup>うすものほめ枯れ風のにびひ半空の詞の

ひよきとひづくまき句すも京ふじ七音七堂伽藍<sup>ハ</sup>童  
さうなどうもきこゑ

上毛古海

芭叩問

その絆あるゆきのゆくびえけてねゑめ  
えれゑれ内<sup>ナカ</sup>の絆ともてかゆるとゐるまことに  
何ぞそ木<sup>キ</sup>の藤や山<sup>ヤマ</sup>アヌ<sup>アヌ</sup>萬<sup>ミツ</sup>舟<sup>ボウ</sup>  
をれくやかびく月<sup>ヅク</sup>月<sup>ヅク</sup>うかまくも例<sup>アシ</sup>うや  
涼<sup>ラバ</sup>まくもり三十一言<sup>ハシナ</sup>もいとよひして舞<sup>アシ</sup>しとくに  
けにゆ例<sup>アシ</sup>一真<sup>ハシナ</sup>歌<sup>カタ</sup>一<sup>ハシナ</sup>二<sup>ハシナ</sup>三<sup>ハシナ</sup>にありますまけ

義理堂巻第十九ノモテまゐるを年少ノリ。かゑがす  
かずのふにじやにらすより同十ナセノ。まぬくハみ小  
だくとも形の三さきてええと立のばぐ  
すて入所歎ハシトドみてうきものなしハまつて  
かやのとどハタガキてもアラニ。また又今  
用ひやれ因ハシヘソれ因少つアリセラモアレ  
薄ばと算を多くよ入所ハシ本後の源  
りべきをやれ因よきひなてよれ因とけり。  
足すきにあはれどもくらうて用ひへき  
よすおがせ

上毛新田

眠石問

いづへの被とみに初の被ひよるとモセ  
モ小つみて二十一字。トナーハ、ソムリヒトコラ  
トア所歎もまくまくへつてはまへ  
涼曰、ルも又ミジハドー經歌の三十一言にまゐる  
もの多きあめつちれまくはれる。もふ舞き、  
上ナセ云々陽ねうてめづア太なる下十四言、  
陰ねりれぞめづアせり。れ今よあめづ  
まくまくそこのへうべとある。如に何處と見ま

侍へ行歌ハ其の外をなれどひとりよしよ

上毛亀岡

鹽車問

旋歌歌ヨキハ短歌ヨキハ其の外をなれど行歌  
リモドクハ十四言ナリモ一句有リト一有リト小十七

言ナタハ一句トナラハ十四言ロハシハ多シビ

おほゆ活脱リ

涼日入岐石ユヌキモトセ十七言ハ歌のづ  
モトセ

モトセハ多シノリテ十四言の後句歌のづ

モトセハ多シノリテ

傍小布川在出で問

じうちテ行歌の文ニテモトセ十四言歌  
マサ唱ヘて上比句是につけるにナラニ  
スルシセシ

涼日またリテハ行歌の文ニテモトセ  
モトシヘハトセ句歌の文ニテモトセハトセ  
ナリヘハジテ三十ー言を數ナリ小トセ句ナリ  
シテの句小トセナリナリハ人リトの句と歩  
一テコレ上比句とテじゆと後陽の透琴  
あづくレシモ皆の下水ナリトモトセアガツラの解

事ひゆるもとあらすあり

青戸在出で問

アラバ十四言此句もじとうにてとひそく  
涼曰三十一篇の下れ句ゆり連歌の後句に却て  
ひづけたるものれど今やうへ行歌の後句  
おとせもじきとくにはれを上れ句のいろは  
借すすよへくひづけにてことよりべきれ

上毛伊勢崎

笑風問

肩小きな腰こしてあをあわせと人ひとすてぬあどり

乙鳥井國おとねにありてゐまを後さとりよ  
えものもののふちて甚ごんい黒くろめり甚ごんかのか  
涼曰其その産うぶとむきて左さとと又またうれびゆ  
すもいひぐくがくをゆきひよきひよき  
にもひみか人のひとへうちうろとままけて  
ひゆひつ人ひとよじくふとまくわくともあるも  
ひれ是これ甚ごんみだりひよ初はじからもくもく  
月つき今いまもつとあくハ枯かれぞ行ゆぎあよひ  
ウとつりくス枯か無む賦ふ日野有あり歸かへ燕つば隈隈有あり観くわん

集日記草稿文庫へ

同

羽成問

葉小切字シナカタをあつて蕉門二十五回と  
いふ字シナカタをあつて小や  
涼曰まだ切字シナカタをあつて何れとも其の前後シナカタを  
の助音アシヨウをひきべし蕉門二十五回  
はうじりてあまきよきよを先助音シナカタ  
りふるはせよふれなばくおまてこれをおなじよらす  
やえよよめとくべるあるよすよ一局を切之を

よきのと小こりとあるはそれがのづの助音シナカタ  
きてちが小まれ經シナカタが小まれふ今やされけ放に  
あれ助音シナカタにて何ともて甚意シナカタをあつむじに  
あくと見られてもれの風シナカタと仰いるはつま  
なくものとぐらうかくうろとあらはれもれ  
て言れ助音シナカタよりなりとがくび切字シナカタをものに  
まづすはれおのづシナカタ甚意シナカタをあつむみれ  
助音シナカタのはととくとくとく

同

蘆洲問

ちまほまれ御はりを短めもちまほへきた  
すあひづまうりづ

涼曰其間其とくらりハかやい小侍りされどんれ  
其の例少ますせでしづきゆりもくちもま  
林ちととぬくみちまうと成るる皆後乃  
とよこなしとぞ見にうりておわいとせもく成くり  
ぐすまわとせれが中小短取のととひりあ禁  
みも出でりとぎみ多はるのと月のみどくねみと  
とみふ霞川もきを自らじりつるれど  
ニシトカミキ例とすゞ

同鹿橋

素輪問

テ教を乞ひのあひくら等とせせくびづけ  
きくともうる画を漱ち匂ふも印と角む  
すも身附す

涼曰其間其とくらりハかやい小侍りされどんれ  
其とくらりハ小方武の事時源治日小語ありて  
是を修しめ周身の人に用ひゆくあり津國より  
印と角むと云ふ今代ごく身み事のとめ  
とよこなしとぞ見にうりておわいとせもく成くり

タテシ印を擧る小毛より、あらわし儀みよま  
印用やじハあらべて、よアリテ、もに、レ、持れ  
印用のうち、先小ども、多例の例、小ぢ、ぬ、まう  
すよ、て、漢文、毛、ぬ、は、ら、あ、れ、ね、ど、匂、け、ぢ、め  
あ、一、セ、せ、よ、毛、も、か、い、ち、モ、ハ、ほ、く、に、ひ、め  
ある、毛、も、て、あ、ま、う、び、そ、も、く、禁、印、を、あ、て、  
け、ぢ、の、と、毛、も、し、り、と、や、ま、す、や、う、だ、て、く、せ、の  
る、と、布、お、あ、小、枚、ノ、角、は、ば、澤、園、や、も、五、代、  
時、あ、敷、て、よ、と、と、壁、代、廊、行、て、集、と、ま、と、越、い  
一、ゆ、名、ふ、名、の、印、走、割、宣、て、名、小、毛、を、用、い、る、と、其

用、れ、速、り、る、と、リ、う、當、に、找、あ、け、り、く、す、け、り、を、以、漢、文、  
ま、ま、ぶ、人、を、い、る、の、り、よ、ても、唐、し、れ、う、が、レ、ば、よ、り、い、  
オ、や、ま、と、燐、み、そ、ぶ、人、が、う、で、か、せ、ね、ま、き、の、す、も、廟、  
な、タ、ル、ル、に、我、う、不、ハ、た、に、と、な、り、に、と、人、で、古、車、紀、  
萬、葉、れ、た、が、い、も、人、付、人、の、目、小、あ、ま、る、も、の、を、文、字、あ、あ、  
あ、が、で、う、が、ト、部、の、家、よ、ハ、神、代、け、文、字、一、万、五、千、三、百、  
七、十九、字、う、と、す、る、も、ば、ざ、れ、で、人、の、用、と、な、ま、び、ま、  
天、武、の、序、代、小、境、部、連、新、字、四、十、四、卷、を、造、る、と、う、い、ど、今、  
在、に、あ、ま、る、あ、れ、で、す、と、す、う、う、ハ、毛、不、用、の、あ、な、り、今、

了の朱印ハあくと唐國のゆがれど其用あるなり  
タリカレモ高外すも唐國の事にならひらそ  
エタベキダルモノトクタガシニ宣教せ人の心をも  
リヤヨリ小じの小手ハシ高さきハシテ取る所と云うバ  
いもん佛階と唱つても又ちびがやと云ふ行はべくハ傳  
はるまく行教と唱ふる所くわらて佛階との事と傳ふ  
是もすくやに高さきにさうべ入画を渡す事のに朱  
印用ハ画ハ墨にておほをとすかわうきをが朱印と見  
れかひとほほ先人のみ心り見るハ乞を用ひ候ふ

素輪入問

おに道れくめのひせもした旋び歌のテ教成  
ゆくじよりきする所とつぐにそようもれ其  
ゆくもさきうちおこるとみべーされどやの  
かもじべくや

涼日甚とれもととみゆきよりかれもとぶう  
うすべなりれ道れくのひまのいのとみよ  
まけハまくけトクナリサモ古事ハ古事ナリ其もくテ教成  
おくる古事紀神武條小三島渥ミツ女名勢夜陀多良比賣  
大便小入一時大始信門大始ミツ小坐ミツでさして丹瀧ミツの矢に  
作て其をとぼくならぬ毛ちりもみてうしもくも

子はまきこり假ならうするハ白玉の御行うれすえ後う姫  
取地とお行おどすのものいふも其まとおきくと  
ゆる枝見になつてゐとまづけにふりやね、ゆくと  
なくまきまわ旋路金の行船みてさかてだへてひま  
う十九云の行船も興一ほきはき時とひへきて  
あれがくる事多くめがみよおやくハカリ秋のうすが葉  
しきるきりはるものだらかほんじなゆすまひて

同

平胡問

登句てふ調をもて句と唱つて又行歌と唱つてや

涼曰上をもと登句とひるハ一句と多くとす、行うべし  
今いままきくものうて其巻のがらに何句がいふおのづ  
う登句と唱へまくらむとすとし、おなじ行句がう  
一やばくのうと登句と唱へうまくとて、ひて、上れ  
句とれ句とものバ一句ともりび一音とお様ひべ

同

吳笠問

吉後は虚實行うとまくいふもいひべき  
涼曰虚實よりよく考が済せりとしとぞのうと  
もいあがへおでうと文質のうとしがたくられ文質の

同

我よが行歌とよひ人内小やまくこち

ベテルをもて度き道にせん

涼曰人は昌へ居るもあてりと通じて廣き道  
中をめぐらす。市川よりは、御優ゆうのあとは名天の  
下にあり。此のまことに画には屏風よしもとからだにもう

山れの古里もこの市川と唱へざるものなしれども  
彦き道とせんや今能満了るものあればこはれて是を  
唱へるものかと見ても彦き道といふやうくを  
よぶよびせよもれ市川をまよひて家もまわめがく又  
俳諧をまよひて詠とも云トテ又心うる人にもどきじ  
りりてみすべきものまきあひ市川彦き道とせんや我  
片館れよもれ我乎へにひいて彦く其詞の事を正すが爲  
小り角にそとほくと假宇にせけ又たよすかくに  
其行歌はるもとつるをよゆあす原木左近は人ノイ  
知はるをまた道なりや是れ彦き道とんや

同

麥丈問

真草行つるもの、何とぞいた

涼日、れのひみれ、おれ、せたひ、せよ、すと、ま  
しも例ともて、ひじり、と、まし、も、ま、禁等の様も  
おげ、今れせたり、は、真草行とも、あ、うもの、あ、う  
うの、まことの、と、あ、うの、び、う、は、ま、と、う、一、あ、う、  
少、も、お、こ、ら、れ、ま、く、侍る、ふ、む、け、う

同

燕山問

内、歌集、凡、例、文、字、は、條、ふ、か、も、よ、あ、う、て、か、う、に  
お、ふ、か、も、あ、う、と、う、う、う、な、る、意、侍、る  
涼、日、布、に、か、そ、う、だ、に、と、く、も、石、燈、を、お、そ、す、る  
石、燈、の、文、字、に、あ、ざ、れ、ぐ、な、じ、ス、百、姓、と、書、て、  
農、民、て、す、小、河、び、う、し、を、石、燈、の、字、に、あ、わ、く  
も、う、け、よ、る、書、が、く、く、農、民、て、も、書、が、く、く、も、て  
お、ね、て、う、れ、う、に、あ、う、一、ほ、多、く、と、き、べ

同

黃牛問

片、歌、ひ、い、ゆ、への、名、同、な、う、う、バ、伝、と、れ、問

古ふのそはりべくふ四言けりの例小まとせて  
江をもてすようにせべきを外小今までの  
よ小からくばよかい

涼曰ゆふそよがふ其時代の風俗小まとぐるあり  
あらどもよみ筋ハタケい古れをすうてやハタケもね、成  
りし又今り詞ハタケもわやくハタケ古ふけりどもよみ  
中ハタケ小ハタケ経ハタケて今ハタケ通ハタケをぐふととハタケうくハタケせばハタケ、  
旋ハタケ歌ハタケ片歌ハタケ小ハタケの傳ハタケはねうちハタケ十七三の  
行歌ハタケ小ハタケひなすハタケとハタケふ言ハタケ六言ハタケすよきハタケ風  
歌ハタケあくハタケ小ハタケの傳ハタケをりとハタケもとめて、ハタケいべハタケだ

上毛高崎

分江問

源氏の物語在れ宴のをすも探訪ハタケはづて  
よつくりよすやハタケとありハタケおわづらハタケはわくハタケく  
歌ハタケとよみハタケべりかくハタケあをみハタケよもいま  
すれけ歌ハタケのみハタケよとハタケ滑替ハタケとあるハタケ  
りすもくハタケくふまハタケや

涼曰大内の序題半ハタケ漢文ハタケひづらハタケて我往  
滑替ハタケりと相ハタケへぞハタケとハタケほりくハタケかハタケとハタケふりくハタケ  
りすもに仰ハタケれど漢文ハタケ漢文ハタケのうにハタケて歌ハタケとハタケ

まことわらに遠へます遠へるハ遠へるうてまして  
あそじく行ふるゝかくよと白玉朝の御子漢語を  
まへてせみるもくへ先へたんへくとくまゆ  
なりもくろり行教カミハ漢士カミれるもあらねば何がをを  
く國の清教カミるもくカミお行はまへ

同

### 麥舟問

大人今れぬきはほまくと附ハテすよものな  
詣よそむら古教をもろくもよきとまげ  
もの小ちばずハ行教よしゆづかるべくとされど

じつきゆくとせうせうアハシマク  
涼曰人へくあやまてえスくハモモ足ゆるけりかくまく  
さあくまに行くますにいのぞく行教と唱ふる  
よて今までり事野。俳諧の趣小かくはされ  
ども其教をすはは西きひのうしてこれ  
うすぐりそひ之をじつり行教とみなし行教等ハ  
あづくせらにあてじとも左津よそり左教の  
藝ともよしらうり是人れぬめうりかくとまびて  
うて後れをよまびてすを道をへれと  
すが原小れめづく成し教を立たゞいは

片哥首尾同書

同

琳李問

旋ひ被の行朝と（ぐ吉云とひ）短歌の行  
歌と（つゝ）今やれ酒をせうまいにめ  
かはうにあまり

涼曰向の隙アシタマよりわりやまと旋以あは行歌も  
行歌のよしめなりあてせま行アシタマト短歌  
行歌アシタマトはいあてせまくをに傳アシタマス而ナリよてをと  
うもあて其の向アシタマも詞も新歌の經歌行アシタマト旋以

歌ハ異ニ有ハシムか小世に傳ヒムスルハナケモバカノア  
甚ニシムモナキナリテモ少テモナリテモ先セテ歌小一  
リナ附もとのどトヨテ十九言歌テ歌の内ハシレ薄小  
セヨド残モナリナリスナセ十七言の内歌ナシマニ比  
親ナシモナリナリ小狂ニトヒヘドモヨク詞のあと残  
シテシカヘハカギナリトク今ミカムジト其ムト  
ナリテナラ附ハニモ道ニナリナリえ朱人ナヤハ信言  
ナリカハ古代祖ムテ萬葉集小よりみる歌のとモハ  
すほノリ今やうのテ歌小用ノリ詞多ナリ也ハ中 小時  
さゆることナリベキ成傾螺トウヒこのクレガヘミ成

下句とつよたくひのゆも侍小ば夫ハ其潤にかとま  
と、及くよひなめられといきすまゆめぢ

上毛玉村

勇水問

うへ句と考へてふとみゆみとぞけてゆはせ  
ぬじみ何なるをとてきにと組を籍トヨア  
ユキのみとしれどもとせ二月てみは一月と  
おもいづじ

涼曰匂れうへの助語にとぞきをなど、すすハ找久く  
絆トテうく共かハえまおとむきハレトシモ

助津なれど找りハ十七言み、外きぬ小かるだよま  
助語と角するハあきとくとくはなむかのうなしハ經歌  
坐代歌ハ意<sup>セロ</sup>と巧<sup>タク</sup>すて潤波やくにゆひとくもの  
けりテ歌もし、<sup>スナコト</sup>はまはまはまはまはまはまはまは  
意を巧みて祠<sup>スナ</sup>とすくとあわがれを難<sup>シ</sup>と  
共<sup>シ</sup>小さもとで等代歌<sup>スナ</sup>助語<sup>スナ</sup>用わばよきくゆるう  
ともひそれ一言なりとぞハも代一立なりとて又は  
用<sup>シ</sup>れども匂<sup>スナ</sup>ハ石用の助津<sup>スナ</sup>とゆすなうス  
なゆす<sup>シ</sup>詞<sup>スナ</sup>物<sup>スナ</sup>とふ<sup>シ</sup>候<sup>スナ</sup>するよにとハ後<sup>シ</sup>に  
とハにあ代<sup>シ</sup>一は少<sup>シ</sup>て後<sup>シ</sup>の小<sup>シ</sup>をよそとつてきと

ひのれは邊る邊はれいと序歌小角おはくべき詞を  
つづれの判小説りも是をばみあてうはるといひまき、  
石用なう毛ハなけ一云あて傍代音便と用ありソノル  
わくうにともぞんをかのねのたぐひはとおり

同

青賀問

ひのれは邊林は季のそにてやもえあと季にえ代  
葉もま枝代もそりて暮ハ季小うべせゆゑ  
いふ

涼曰すべて季方ハ後代をて季下のゆえで季方代あて

其が代ちすのを多くし一筆あ方より病を立  
持のそよすまセあふまセて詠めもよみにふあ危  
拘みれ海けを今も季方どもとすら摩かんを後  
なりてまく其季方より詞をよしむに意は御ある  
偽かか一筆れどもこれ俄小宵くべきふもうねぞ  
そぞくく季方小字こひてのくじゆく小夜林の  
事の方を立たばうとすらすに向ゆすべすでに  
物なれとおれ辭とすらすに向ゆすべすでに  
其句すも多かれど寔小字ふくしももよされ  
てくしきの算ざら行とももも夏月ハ松の

さの句作あし無詠みは取とまふよみるはく

かく

上毛桐生

四道 千兆 共問

吉備公五十歌をもて言語をもへりよくせられ  
うるを行ともて言語をもへることせきや  
涼日<sup>クモリ</sup>古語拾遺みむちもくされ<sup>クモリ</sup>之字成  
あてて人に峰詞すもほへりと夷小さもりじ  
ラハ其詞とあてほへりる多小其詞即<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>れを

つまでもばドスレハたの假字<sup>カナ</sup>代<sup>ハ</sup>たの音  
あり其假字のはきある音あり其外ひの字<sup>ハ</sup>いの音  
いの字<sup>ハ</sup>いの代<sup>ハ</sup>音もくづら<sup>ハ</sup>りとある音み假字其  
音代<sup>ハ</sup>せる物な<sup>ハ</sup>入<sup>ハ</sup>假字<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>假字<sup>ハ</sup>  
はて其<sup>ハ</sup>いあは<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>れとも其<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>假字<sup>ハ</sup>  
もとりそいみへの假字<sup>ハ</sup>より<sup>ハ</sup>假<sup>ハ</sup>字代<sup>ハ</sup>切<sup>ハ</sup>離<sup>ハ</sup>  
遠<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>と

同

百蛙問

何<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>特<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>の何<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>信<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>

はまひのゆきへ

原曰軽きよりい倍とくされも後のをふりて不すり  
しの軽倍とて二つあれば其軽倍にりりす  
むし人の歌であるをひかへずれどくられど  
かくよゆにてねみばりしてよじてとすむす  
すらるてよじなふとくべに名をも黒牛  
の郡武賀野れなどりかぬ詞する様の  
ある所浅其はふよみ出せり詞ハ元来其の言を  
よみてある冠の词もよてよきびどみ其とぞれ  
至りとぞうてひつてあはれ成清代をふりて

先代詞とはうべー史事よりうつをうちつ  
うべーかる詞又唐之词西のが國にすもうも  
うらじてともが申み多く倍倍あり出せり  
ものたれぞ今わざりて生びく軽倍ある  
ゆうう着言みゆて何成倍とくの倍とく倍とく  
まく軽言ばつまれとくつせりいじくとめつう  
中てたゞへ一際の倍は女の方の筆すまさせ  
度言はうううて和諧のやにて書はりたうじ  
まで倍なりとくとくがうて今倍とく詞大み

物言あり在りて又人やれ常宿み度られ  
古言此面白き浅ゆきあひて唱へずとやうになら  
ほのゆにほとへされ有小目とわひとバタトカセ  
はくめうをの因故りとく或ひをあは因故  
ちり吟すよしゆのよすえはんじハモトウ  
月とわたり妹が月とわたりとよする歌アキハリハ  
歌する事今りよあふうとほきとゆかす事  
舞め成りゆけどもよみとゆる人アシタ常  
詠み應られもすうと小ひよどりす小新田山  
今上毛の吉田山は、後若佐家と云ひて嘗て

御多鬼あざ山とするたの家小宿宿と先す  
多トヨク共さういと学びよすまへ

同

鶴城問

画法蘭以喜氣画竹以怒氣画とりは益を  
すく風雅かくやく意とて作より侍りや  
涼曰めり成りて作よりは筆灰わげほとて直  
ちくへてよしときハ達み人れをのうりとつて  
考へひきく女かうらてよしとてきとます  
其々と用ひておどみとてよしとて三教五道と

タメベー

同

舊 硏 問

支々の序小世歌あつちげあもんぬ  
けりうてきとせ歌ひれは歌ひや  
涼曰國常立尊よりもよて面足惶根尊ひそふ  
までいまとお詠よりなきを伊弉諾尊にいそ  
まで始てあなづ川のまくハ唱ひてまを貫之  
神歌とハルとさしてちにまへるなり以上日本紀  
神歌とハルとさしてちにまへるなり說ヨル  
神歌とハルとさしてちにまへるなり以上日本紀

